博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）　田島　充士　印

学位申請者　岡　葉子

論　文　名　日本語学校生の学習動機および自己形成の時間的変遷　―「期待価値理論」を援用して―

【審査結果】

田島充士を主査とし、副査として研究指導委員会より宮城徹（主任指導教員）、早津恵美子、さらに外部審査委員として文野峯子（人間科学大学名誉教授）、守谷智美（岡山大学准教授）によって構成された審査委員会は、2018年9月14日に上記論文の審査ならびに口述による最終試験を行った。その結果、審査委員会は全員一致で、申請者に対し博士（学術）の学位を授与するのが適当であるとの結論に達した。

【論文の概要】

本研究は、従来、学術的な検証の対象となることが少なかった日本語学校生の学習動機と自己形成が時間的にどのように変遷するのかについて、大規模質問紙調査と4名の学習者に対する面接調査を行い、それを深く分析したものである。そこでの注目点は、（1）従来の学習動機研究において注目されてきた内発的動機や自己効力感以外に、学習動機を支える要因にはどのようなものがあるか明らかにする、（2）学習動機を自己形成との関連の中でとらえるということである。

そもそも学習動機が教育現場において注目されるのは、何をどのように学習すべきか自ら考えて行動するという、学習者の主体性が学校教育の課題として挙げられるようになったからである。日本に留学する者のおよそ3人に1人が日本語学校生であるにもかかわらず、これまでその存在に注目した先行研究はたいへん限られている。彼らの多くは10代後半から20代前半の若者で、高額の費用を負担する私費留学生である。2年という期限の間に、自分の進路を決めなければいけないいわゆる「浪人予備校生」的存在であり、心理的、社会的に不安定な状況に身を置いている。先行研究においても、彼らの問題点を明らかにし、それに対する改善やサポートを目指そうとする研究がほとんどであるが、本論においてはむしろ特段の問題を抱えていないようにみなされながら、学習を継続している日本語学校生を検討の対象としている点に新奇性が認められる。

論文は全8章、154ページと資料集45ページから構成されている。その特色は、先行研究、特に教育分野のmotivationに関する幅広い先行研究の検討、独自の類型化、これまでのmotivation研究において注目されてきた内発的動機や自己効力感以外に、日本語学校生にみられる特殊要因の探求、さらにmotivationを自己形成との関連からとらえようとする新奇性、motivationの分析に、日本ではまだ珍しい期待価値理論（Eccles & Wigfield, 1995）を援用したこと、量的研究において複数の因子を見出し、その関連について分析しただけでなく、質的研究において、具体的かつ詳細な分析を試みている点などである。

以下、論文の構成に従い、章ごとに概要を示すことにする。

第1章においては、上述のような研究の背景、目的と意義について述べ、各章の構成について述べている。

第2章では、motivationという用語が日本でどう訳され、どのような意味で用いられてきたかについて、教育心理学、第二言語教育、日本語教育研究の3分野に分けて、検討している。その結果、本用語の適用分野が広がるにつれ、定義が複雑になっていること、同じ用語を用いながら定義が異なることもあること、単純な類型化も不可能であり、今後は各研究者が明確な定義づけを行う必要性があると指摘している。

第3章では、学習動機研究が日本語教育においてどのように発展してきたのかについて、大きな三つの類型（第二言語教育学・教育心理学・社会学領域における諸理論）に基づき、分析を試みている。その上で、①学習動機研究とその全体像が研究者の間に共有されていないこと、②三つの類型においても、構成概念が重なり合う部分もあり、これらを完全に切り離して分類することはできないことを指摘している。さらに2000年以降の研究動向として、特に内発的動機や自己効力感が注目されるが、長期間にわたり外発的な動機による困難な学習を続けねばならない日本語学校生を分析対象とする場合、「勉強は楽しい（内発的動機）」「自分ならできる（自己効力感）」といった変数のみによって彼らの学習メカニズムを検討するはできないと指摘している。本章後半では、日本語学校に関する先行研究を広く渉猟し、その問題点、未解決の事項を明示している。

第4章においては、本研究において用いる主要な理論として、自らの能力や結果に対する「期待」、学習の意義への「価値」、課題の難易度に対する意識である「学習困難」から学習動機が構成されると考える「期待価値理論」(Eccles & Wigfield, 1995)が紹介される。この理論は、内発的動機と自己効力感を中心とした学習動機論とは異なり、困難な状況においても学習行動を維持するメカニズムを含むものであり、日本語学校の学生を分析する枠組みとして適切なものであることが示されている。本研究では、学習行動を促す学習動機の要因として、「期待」、「価値（獲得価値・内発的価値・利用価値）」、「学習困難意識（学習困難・努力必要）」を想定している。またもう一つの柱としてErikson(1959)らに端を発するアイデンティティ理論（申請者は

「自己形成」という用語を用いている)を据えている。

第 5 章では、質問紙調査の実施経過と結果が示されている。日本語学校生を対象に実施した調査(配布数 650 部、有効回答数 406 部)のデータには、探索的因子分析および重回帰分析を行っている。その結果、期待および価値を示す因子と学習時間・主観的達成度・自己効力感との間に正の有意な因果関係が認められた。また学習困難意識を示す因子については、学習時間との間には正の、自己効力感との間には負の有意な因果関係が認められた。以上のことから、期待・価値意識に加え、学習困難意識には、自己効力感を弱めるリスクはあるものの、学習行動を促進させる働きもあることがわかった。

第 6 章においては、上記の質問紙調査のうち、「多次元自我同一性尺度 MEIS(谷 2001)」に関する部分を用い、学習動機と自己形成及び在籍期間の関係を分析している。その結果、在籍期間が長期化するほど、学習動機は概ね、低下することが分かった。在籍期間が短い学生は「日本語は楽しい」「頑張らなくてはならない」など積極的に学習に向かう意識が高いが、在籍期間が長い学生は、日本語そのものへの興味や自分の能力に対する自信が有意に低下することが分かった。また自己形成についても同様に、在籍期間の長期化にともない有意に低下する因子があることが分かった。さらにこの因子は、期待に該当する因子に有意な正の影響を与えており、自己形成意識の低下が学習動機の原因となっていることが示唆された。

第 7 章では、4 名に対する縦断的なインタビュー調査について詳述している。その結果、学習が進むと学習困難意識が高まること、学習環境いかんでは自らの能力への期待が上下することが明らかになった。特にクラス内の人間関係の充実度が能力期待に影響を及ぼしていることもうかがえた。さらに本調査では文野(2004)に準拠した、学習者の人間関係を示す「同心円図」等が補助データとして収集・分析され、それがインタビューのリアリティを高めていることが示された。

【審査の概要及び評価】

審査は冒頭に主査による審査委員の紹介、全体の進め方の説明があり、それに続いて申請者から PPT を用いた論文概要の説明が約 25 分間なされた。その後、各審査委員と申請者の間で活発な質疑応答が行われた。約 2 時間の公開審査の後、審査委員会で最終意見交換を行い、上記【審査結果】の如く判断した。

具体的な審査の概要は以下の通り。

各審査委員によって指摘された本研究の長所は以下のとおりである。

本論文については以下の点において高く評価された。

・日本語学習者の中でも、調査のための関係づくり等が比較的困難である民間の日本語学校の学習者に対して、大規模かつ一定期間にわたる調査を試み、貴重なデータを収集し、因子分析・重回帰分析などの統計的手法を駆使して、詳細に分析を試みている。

・これまで日本の教育分野において、その訳語と定義等について、広がりと混乱が見られるmotivationという用語について、先行研究を幅広く渉猟し、独自の視点での類型化と、明確な情報整理がなされている。さらに今後の研究者が再定義を行って使用することを提言している。
・日本語学校生を対象者とする場合、内発的動機や自己効力感以外に学習動機を支える要因にはどのようなものがあるかを検討し、適切な分析概念として期待価値理論を採用している。その理論では、学習者の「期待」と「価値」の認識が、タスク（日本語学習）の遂行や持続性に直接影響を及ぼすが、これらの認識は文化社会的な文脈の中で形成されると考えられている。つまり日本語学校生の「期待」と「価値」は異国である日本での学習過程において、変化することが予想されると捉えられている。
・さらに滞在期間の長期化により、彼らの自己認識、自己形成に大きな変化と成長が生じ、それがまた学習動機にも相互作用的に影響し合うというダイナミックな捉え方をしている。
・現場の教員ならではの気づきに基づいて、現実の教員や日本語学校生の皮膚感覚に近い考察を展開している。

以上のように本論文は、申請者の長年にわたりフルタイムの講師として働く日本語学校生への熱い思いを通して博士論文を書き上げられた、きわめて実践的価値の高いものである。さらに論文執筆に関連して、6本の投稿論文を執筆し、国際学会を含む6回の学会・研究会発表等を行い、本研究の質の向上に努めてきていることも記しておくべきであろう。

一方、各委員から、本論文の問題点として、以下のような点が指摘された。

第一の委員からは、日本語学校生の学習動機を見るためになぜ期待価値理論を用いることになったのか、その過程の記述があいまいであるという指摘がなされた。また論文後半において、申請者は、日本語学校生が時として抱えるマイノリティ意識に着目しながら、それを如何に現場に生かしていくことができうるかについて、何の言及もないのは非常に残念であるという指摘があった。

第2の委員からは、後半部の質的研究において、方法論、結果、記述の方法にややわかりにくい点があり、特にコーディング分析が行われているが、その目的が不明確である、さらに同心円図の利用についても同様のことが言えるとの指摘があった。

第三の委員からは、単純な誤字脱字がややみられること、自己形成や多次元尺度といった鍵概念に関する定義、先行研究等に関する記述が不十分であるという指摘がなされた。

第四の委員からは、量的研究部分に比して、質的研究部分の分析、考察が不十分であること、同心円図等を作成しながら、それを十分に活用しきっていないことなどについて、不満が述べられた。

第五の委員からは、本研究には高い新奇性が認められるものの、それが読者にストレートに伝わりにくい書き方になっていることが問題視された。また日本語学校の実践に対する高い貢献可能性が認められる結果が示されたにもかかわらず、総合考察において、ここで得られた知見が、新しい学校・教室運営にどう生かせるかといった具体策や提言が十分になされていないと指摘された。

しかし各委員からの以上の指摘は、決して本研究の意義を大きく損なうものではなく、申請者の研究に対し、審査委員が今後の発展の可能性を示唆する意味を含めた学術的関心からなされたものである。審査委員からの質疑に対して、申請者からは、一貫して的確な応答が示された。指摘された問題点についても、真摯に受け止め、今後の研究に反映させていきたいという前向きな姿勢が示され、今後の成長と活躍が十分に期待されると考えられた。

以上のことから、総合的に判断した結果、審査委員会は全員一致で、申請者に博士(学術)の学位を授与するに値すると結論付けた。